



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語古文献における仮名の用法 : 日本語とアイヌ語とで表記上の差異は存在するか
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 154, 73 (左) -99 (左)
Issue Date	2018-03-23
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.154.l73
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68677
Type	departmental bulletin paper
File Information	154_02_sato.pdf



アイヌ語古文獻における仮名の用法 —— 日本語とアイヌ語とで表記上の差異は存在するか ——

佐 藤 知 己

1. はじめに

アイヌ語を記した日本の古文獻の先駆的研究としては、金田一(1913)、金田一(1924)がある。金田一はアイヌ語学者であると同時に国語学者でもあったので、記録されているアイヌ語に関する分析はもちろんであるが、古文書に関する文献学的考察や国語学的考察にも配慮が行き届いており、これらは現在でも参照するに足りる優れたものである。とはいえ、今日的観点からすれば、理論面、方法面において金田一の研究にも問題が全くないわけではない。最も問題と思われるのは、金田一のアイヌ語の歴史的変化に対する態度である。古文獻に記録されているアイヌ語は、現代から数百年も前のアイヌ語であり、その間に何の歴史的変化もなかったとするのは現実的でない。アイヌ語に限らず、言語は時間と共に必ず変化する。アイヌ語がアイヌ語話者自身による古い記録を欠いている、という歴史的研究に不利な事情があったにせよ、金田一は古文書のアイヌ語を現代のアイヌ語によって解釈することに理論的な問題をほとんど感じていなかったようである。言語の歴史的な変化の研究には、文献の表記に関する綿密な研究が必要なのであるが、おそらく、金田一がアイヌ語の歴史的な変化の可能性を深く問題にしていなかったためと思われるが、金田一の研究には文献の表記に関する組織的な考察はほとんどみられない。

これに対して、アイヌ語を記した古文獻に関する近年の研究としては、佐
10.14943/bgsl.154.l73

藤（1995, 1998, 1999, 2008, 2009）があり、これらはアイヌ語の歴史的変遷の可能性を念頭に置いており、従って、金田一の研究では触れられることが少ない、表記に関する分析にも注意が向けられている。とはいえ、この時点では、やはり資料上の制約があまりにも大きく、また、表記の研究には、膨大な量の文字データの整理分析が必要であることもあって、基礎的な資料の整理、整備の段階にとどまらざるを得なかったことは否めない。しかるに、國東（2010）によって、宝永元年（1704 年）という書写年代が明記されたアイヌ語の古い記録「狃言葉」が福井県福井市南山町の普門寺という寺院で発見されたことは、アイヌ語の古い記録、ひいてはアイヌ語の変遷を考察する上で、重要な手がかりを与えるものであったと言わなければならない。それまでは、アイヌ語の古い記録と言っても、その多くは来歴が不確かな写本であり、成立年代は古くとも、書写年代が新しいものであることが極めて多かった。記録された当時の表記的特徴を保持しているのかどうか、保証がまったくない資料が大部分を占めていたのである。このような資料を文献学的に綿密に分析しても、古いアイヌ語の特徴を発見することは不可能である。しかしながら、書写年代が古いことが確実なアイヌ語の古記録というものは、近年まで、事実上、天理大学付属天理図書館所蔵の「松前ノ言」一点しか知られておらず、佐藤（1998）、佐藤（1999）は、表記にも注意を払いつつ、この文献を詳細に分析した研究であるが、そこで指摘されたアイヌ語あるいは表記の特色が、果たして本当に古い時代の特徴を反映しているものなのか、あるいは他の要因による、単なる偶然的な特徴であって、必ずしもアイヌ語の変遷にかかわるようなものではないのかどうか、明確に決定することが極めて困難であった。なぜなら、比較対照可能であるような同時代の他の文献が皆無であるために、判断の基準となるものが事実上、皆無であったからである。今後、さらに時代をさかのぼる、書写年代の明らかな文献が発見されることがもちろん望ましいが、最古の時代に属する「松前ノ言」に、より年代が近い（それでも 70 年ほどの差はあるが）、年代が確実な文献が発見されたことで、両者の特徴を比較して、もし一致していれば、それらはより古い時代のアイヌ語の記録の特徴である可能性が高いと判断することが、ある程度、

できるようになったのである。このように、國東（2010）による「狃言葉」の発見はアイヌ語の古文獻の研究にとって画期的な意味を持つものである。佐藤（2014, 2015, 2016）は国東（2010）の発見を受けて行われた「狃言葉」に関する基礎的研究である。今後、これら最古期に属する文獻の、より詳細な研究から出発して、アイヌ語の古記録や歴史についてさらに研究が進められることが期待される。

本稿は、以上のような研究の一環として、古い層に属するアイヌ語の記録には、これまであまり注目されて来なかった、共通の独特な表記上の特色があることを指摘するものである。さらに、その結果を応用して、内容面から「松前ノ言」（1624-1644?）や「狃言葉」（1704）に年代的に近いと思われる文獻ではあるが、書写年代が書かれていない文獻「狄さへつり」（岩手県盛岡市「もりおか歴史文化館」所蔵）について、資料的な位置付けを試みるものである。

2. 仮名の歴史とアイヌ語古文獻の仮名

アイヌ語の古文獻の分析に入る前に、ここで、仮名の歴史の概略と、日本の古いアイヌ語文獻に使用されている仮名について簡単に説明しておきたい。国語学会（編）（1980：153, 733-737）によれば、明治以前は、同じ音を表記するのに複数の平仮名が用いられることが珍しくなかった。たとえば、現在では、taを表記する平仮名は「た」一つしかないが、明治以前は「た」とならんで、「多」、「當」、「堂」なども用いられていた。通常の日本語文は、これらの平仮名と漢字、またはカタカナ（場合によっては平仮名も）と漢字によって表記されていた。明治33年（1900）に標準的な48個の字体が定められたが、それに選ばれなかった平仮名（「多」、「當」、「堂」など）は、「変体仮名」という用語で呼ばれるようになった。また、明治以降、欧米の言語からの外来語が入ってくると、それらの表記にカタカナを用い、漢語は漢字、文法的な形式や一部の和語は平仮名で書く、という習慣が一般化した。

他方、アイヌ語を記録した古い文獻の文字表記には時代による差異が認め

られる。年代は不明ながら種々の証拠によって最も古いとされている「松前ノ言」と、書写年代が明記された最も古い文献である「伏言葉」は、日本語部分には漢字と平仮名（変体仮名を含む）が用いられていたが、アイヌ語部分にも平仮名が用いられている点が著しい特徴である。他にも、18世紀初頭の「蝦夷談筆記」（1710）、「和漢三才図会」（1712）でもアイヌ語の表記に平仮名が用いられているので、アイヌ語表記における平仮名の使用は、早い時期の日本のアイヌ語文献における特徴と言ってよいであろう。これに対し、これらより後の文献では、日本語部分に漢字と変体仮名が用いられるのに対し、アイヌ語部分はカタカナで書かれるのが一般的である。ちなみに、本稿は国語学的な問題を直接扱うものではないが、この点でアイヌ語を記録した江戸時代の文献は、明治以降に一般化した、もともとは日本語ではない外来語にカタカナを用いるという習慣が、実は明治よりも早い時代に蘭語学以外の分野においても確立されていたことを示すものであり、アイヌ語研究においては周知の事実ではあるが、日本語の文字史研究の上でも注目すべき事例であることをここで注意しておきたい。

3. 江戸初期における日本語文献の仮名の用法

古い層に属するアイヌ語の古記録である「松前ノ言」、「伏言葉」のアイヌ語表記に用いられている仮名を分析する場合、まず念頭に置いておく必要があるのは、同じ文献中において日本語の表記に用いられている仮名の用法であろう。しかしながら、アイヌ語文献中の日本語の仮名を分析する場合、今度は、同時代の他の日本語文献における仮名の一般的用法が問題となってくる。アイヌ語の表記に用いられているとは言っても、仮名は本来は日本語の表記のための文字であるから、通常日本語文献における仮名の用法がアイヌ語の表記に用いられた仮名の用法に大きく影響を与えるであろうことが当然考えられる。「松前ノ言」の書写年代は1624年から1644年までの間、「伏言葉」の書写年は1704年であるから、これらの文献に用いられた日本語の仮名表記を分析するには、概略この時代（仮に近世初期と呼ぶことにする）の

日本語の仮名表記の一般的な状況がわかるような資料があれば良いわけである。しかしながら、仮名を含めた日本語の文字表記に関する包括的な研究としては、たとえば中田（編）（1972）、矢田（2012）などがあるけれども、近世初期の仮名の用法に関する研究は膨大であり、それらを網羅的に利用して論を進めることは、この分野の専門家ではない筆者の能力を越えるものである。従って、ここでは仮に、近世初期の一定の文書群に限定した研究である高山（1990）の研究に依拠して、それらと近い時期に成立したアイヌ語の古文獻の仮名の用法を見ることにする¹。

高山（1990）が扱った近世初期の仮名資料は、「和泉流狂言台本」と称される文獻のうち、「抜書」と呼ばれる部分である。「和泉流狂言台本」には、「天理本」と呼ばれるものと、「和泉家古本」と呼ばれるものがあり、松尾（2008）によれば、「天理本」は寛永～正保年間（1624-1648）の書写であり、坂口（1989）によれば「和泉家古本」は承応～元禄年間（1652-1704）の書写であるという。年代的にはまさしくここで扱う「松前ノ言」、「伏言葉」と時期が重なっており、同時代の仮名に関する包括的な研究ではないけれども、研究を進める指針には十分なり得るものと思われる。高山（1990：23）には、使用されている仮名の字体表が示されており、基本的にはこれに基づいて論を進めることにする²。

本稿の末尾の表に、各種のアイヌ語の古記録と和泉流狂言台本の仮名のデータをまとめてある。これによれば、概略、複数のアイヌ語の資料にかなりの頻度であられるもので、日本語資料に全く現れないようなものはないと言ってよい状況であることがわかる（ただし、日本語文獻での濁音、カタカナの使用は条件が幾分違っている可能性があるのでここでは考慮から除く）。このことは、調査対象となるアイヌ語古文獻の数が少ないので、今後の

¹ 高山（1990）の研究をご教示下さった白井純氏に感謝申し上げる。なお、白井（2012）は活字本の仮名に関する研究であるが示唆を受けた点が多かったことを附記する。

² ただし、表のうち、技術的に字体の区別が不可能な「う、く、こ、そ、ち、て、な、の、は、ま、も、ゆ、よ、ら、る、わ、ゑ」にそれぞれ相当する異体は便宜的に同一の字体で表示し、ここでは区別していない。

新資料の発見によって見方が変わる可能性はあるけれども、少なくとも現時点では、最古期に属するアイヌ語文献の仮名の種類は、同時代の一般的な日本語文献に用いられているものと、本質的に大差ないことを示していると言ってよいように思われる。逆に、日本語資料には現れるのに、複数のアイヌ語資料には高い頻度で現れないような仮名（具、遣、須、地、農、見、路）もある。ただし、日本語文献でのこれらの仮名の頻度が不明なので、アイヌ語文献と日本語文献との差異とみなしてよいものかどうか、疑問がある。今後の検討課題としたい。

4. アイヌ語古文献における日本語の仮名の用法

アイヌ語古文献における日本語を表記する仮名の具体例は次のようなものである。なお、詳しい情報は佐藤（1998, 1999, 2014）を参照されたい（松は「松前ノ言」、狃は「狃言葉」の略）。

- 「あ」：あしき事（悪しき事）（松）、あめ（雨）（狃）
- 「い」：いろり（狃）
- 「う」：う連しい（うれしい）（狃）
- 「お」：おひ（帯）（松）、おそ起（遅き）（狃）³
- 「越」：そこ越（そこを）（松）
- 「か」：か王ひ（可愛）（松）、自在か起（自在鉤）（狃）
- 「が」：さがり（下がり）（狃）
- 「可」：た可ひ（高い）（松）、可ハ寿^{*}（蛙）（狃）
- 「き」：よき（良き）（松）、き川く（きつく）（狃）
- 「キ」：浅キ（狃）
- 「起」：寒起（寒き）（狃）
- 「支」：王ろ支（悪き）（狃）

³ いずれの文献でも例が少なく、すべて語頭の例である。

- 「く」： くらひ（暗い）（松）， くり（栗）（狃）
「ぐ」： 徒なぐ（つなぐ）（狃）
「ク」： 赤ク（狃）
「久」： う久ひ（ウグイ）（狃）
「け」： け（毛）（松）， いそけ（急げ）（狃）
「げ」： 飛げ（髭）（狃）
「ケ」： サケ（鮭， ただしフリガナとして）（狃）
「介」： 介むり（煙）（狃）
「こ」： 満こと（真）（松）， たこ（蛸）（狃）
「ご」： むごひ（惨い）（狃）
「さ」： ちいさき（松）， さむい（狃）
「サ」： サケ（鮭， ただしフリガナとして）（狃）
「し」： 本しい（欲しい）（松）（語頭の例なし）， めし（飯）（狃）（語頭の例なし）
「じ」： きじ（雉）（狃）
「シ」： 無シ（狃）
「志」： 志らぬ（知らぬ）（松）， に志ん（鮓）（松）， 志り（尻）（狃）， に志ん（鮓）（狃）
「す」： すこし（松）， 見ゝす（みみず）（狃）
「ス」： 出ス（狃）
「寿」： う寿ひ（薄い）（松）， 可は可ら寿（カワガラス）（狃）
「寿」： 可ハ寿（蛙）（狃）
「せ」： ミせろ（松）， 茶せん（茶筌）（狃）
「セ」： 合せん（合わせん）（狃）
「そ」： そなた（松）， いそけ（急げ）（狃）
「た」： た可ひ（高い）（松）， く満た可（クマタカ）（狃）
「多」： 可多しけなき（かたじけなき）（松）， 多者こ（煙草）（狃）， 飛多い（額）（狃）
「堂」： 堂ゝく（叩く）（狃）

- 「ち」：ちいさき（小さき）（松），火うち（狢）
「つ」：つき（月）（松），うつけ（松），つ者^ゞめ（ツバメ）（狢），可つ堂ゝ
く（かったたく？）（狢）
「ツ」：三ツ（狢）
「川」：あ川ひ（熱い）（松），お川と（夫）（狢）⁴
「徒」：徒なぐ（繋ぐ）（狢）
「と」：やと（宿）（松），とも（鱸）（狢），ことく（如く）（狢）
「ト」：ト言（と言う）（狢）
「な」：なへ（鍋）（松），なく（泣く）（狢）
「那」：そ那多（其方）（狢）
「に」：に志ん（鯉）（松），に志ん（鯉）（狢）
「ニ」：何ニても（狢）
「尔」：な尔（何）（松），尔くひ（憎い）（狢）
「ぬ」：志らぬ（知らぬ）（松），手ぬくい（手ぬぐい）（狢）
「祢」：い祢（稲，ただしフリガナとしてのみ）（狢）
「年」：あ年（姉）（狢）
「の」：の（助詞）（松），もの（物）（松），の（助詞）（狢），あの（狢）
「乃」：乃（の，助詞）（松）
「之」：之（の，助詞）（松）
「ノ」：ノ（助詞）（狢）
「ハ」：ハ（助詞）（松），ハ（助詞）（狢），可ハ可ら寿（カワガラス）（狢）
「者」：た者け（たわけ）（松），者可り（ばかり）（松），者い（蠅）（狢），
火者し（火箸）（狢）
「者^ゞ」：つ者^ゞめ（ツバメ）（狢）
「ひ」：可ひ（櫓）（狢）
「び」：あ王び（鮑）（狢）

⁴（狢）の日本語ではすべて促音表記に用いられている。これに対して（松）では促音表記の例はないようである。

- 「飛」：飛多い（額）（狃）
「ふ」：ふるい（古い）（松），ふる（降る）（狃）
「ぶ」：よぶ（呼ぶ）（狃）
「婦」：婦しき（不思議？）（狃）
「婦」：婦な（ブナ）（狃）
「へ」：なへ（鍋）（松），可へそう（返そう）（松），飛へ（稗）（狃）
「べ」：なべ（鍋）（狃）
「遍」：遍多（？）（狃）
「本」：本しい（松），本しい（欲しい）（狃），こ本る（凍る）（狃）
「本」：本んのく本（ほんのくぼ）（狃）
「ま」：まて（待て）（松），ま那こ「眼」（狃）
「満」：満こと（真）（松），あ満い（甘い）（狃）⁵
「み」：みし可ひ（短い）（松），み多く（見たく）（狃）
「ミ」：ミせろ（見せろ）（松），もミ（揉み）（狃）
「む」：さむい（寒い）（狃）
「め」：あめ（雨）（松），よめ（嫁）（狃）
「も」：もの（物）（松），可もめ（カモメ）（狃）
「毛」：毛めん（木綿）（松）
「や」：や寿ひ（安い）（松），や年（屋根）（狃）
「屋」：屋くはん（薬缶）（狃）
「ゆ」：ゆ（湯）（松），ゆび（指）（狃），もゆる（燃ゆる）（狃）
「よ」：よき（良き）（松），よめ（嫁）（狃）
「ヨ」：ヨリ（助詞）（狃）
「ら」：くらひ（暗い）（松），からい（辛い）（狃）
「り」：者可り（計り）（松），のり（海苔）（狃）
「リ」：ヨリ（助詞）（狃）
「里」：くゝ里（括り）（狃）

⁵ 「満」は（狃）では語中のみに現れる。

- 「る」：うる（売る）（松），泊る（伏）
「類」：死寿類（死する）（伏）
「ル」：出ル（伏）
「れ」：きれ多る（切れたる）（松），おれる（折れる）（伏）
「連」：いつ連（いずれ）（松），う連しい（うれしい）（伏）
「レ」：乗レ（伏）
「ろ」：ひとひろ（一尋）（松），むしろ（伏）
「わ」：わらん遍[〃]（童）（松）
「王」：王し（驚）（松），い王し（鯛）（伏）
「を」：とをひ（遠い）（松），を（助詞）（伏）
「ヲ」：十ヲ（松），ヲ（助詞）（伏）
「ん」：死んだ（松），きん（金）（伏）

「松前ノ言」のデータ量がそれほど大きくないので、これらだけから確定的なことを言えるわけではないが、これらの例にみられるある種の傾向が特定の表記上の特色と言えるかどうか、今後も同種の資料の出現を念頭において種々の面から考察を続ける必要があると思われる。たとえば、高山（1990）には、「和泉流狂言台本」の仮名表記において、いくつかの場合で、字体が語頭、語中語尾で使い分けられる、という指摘があるが、それらがアイヌ語の古記録においてどのような状況を示すかを調べると以下のようなようである。

「和泉流狂言台本」において「志」は語頭、「し」は語中語尾：

日本語表記において、（松）では、「志」は5例あるが、1例を除き語頭である。（松）では「し」は17例あるが、いずれも語中語尾の例である。（伏）では「志」は4例あるが、2例は語中の例である。（伏）では「し」は19例あるが、いずれも語中語尾の例である。

「和泉流狂言台本」において「お」は語頭、「を」は語中語尾：

日本語表記において、(松)では、「お」は2例あるがいずれも語頭の例である。(松)では、「を」は1例のみで語中の例である。(狹)では、「お」は5例あるが、4例は語頭の例で、1例は語中の例である。(狹)では、「を」は160例あるが、すべて語中の例である。

「和泉流狂言台本」において「ね(祢)」は語頭、「年」は語中語尾：

日本語表記においては、(松)では「ね(祢)」は現れない。「年」は1例のみで語尾の例である。(狹)では、「祢」は3例あり、2例が語頭、1例が語尾である。

「和泉流狂言台本」において「す」は語頭、「春」は語中語尾：

日本語表記においては、(松)では「す」は語頭の例が1例あるが、「春」の例はみられない。(狹)では、「す」は2例あるが、語中語尾の例である。「春」の例は見られない。

「和泉流狂言台本」において「の」は語頭、「乃、能、農」は語中語尾：

日本語表記において、(松)では「の」は助詞の例が49例あり、「乃」も助詞の例が22例ある。(狹)では「の」は助詞の例が50例あり、「乃」の例はない。

「和泉流狂言台本」において「に」語頭、「尔」、「耳」は語中語尾：

(松)では、日本語では「に」は2例あり、いずれも語頭の例である。尔は3例あり、いずれも語中語尾の例である。(狹)では、「に」は2例あるがいずれも語頭の例、「尔」は4例あるが、3例が語頭、1例が語中語尾である。

「和泉流狂言台本」において「つ」は語頭、「川」は語中語尾（天理本）：

日本語表記において、（松）では、「つ」は6例現れるが、うち3例が語頭の例、3例が語中語尾の例である。「川」は11例あるが、いずれも語中語尾の例である。（伏）では、「つ」は12例あり、うち2例が語頭の例、残り10例は語中語尾の例である。「川」は6例あるが、いずれも語中語尾の例である。

「和泉流狂言台本」において「徒」は語頭、「つ」、「川」は語中語尾（古本）⁶：

日本語の表記においては、（松）では「徒」は現れない。「つ」、「川」については前項参照。（伏）では「徒」は2例現れ、いずれも語頭の例である。つ、「川」については前項参照。

「和泉流狂言台本」において「者」は語頭、「ハ」、「盤」、「は」は語中語尾：

日本語表記において、（松）では「者」は10例あるが、4例が語頭、6例が語中語尾の例である。「ハ」は8例あるが、いずれも語中語尾の例である。（伏）では、「者」は9例あるが、5例が語頭、4例が語中語尾の例である。「ハ」は332例あるが、いずれも助詞であり語中語尾の例である。

以上の状況をどのように評価するかは、一部を除いて用例数が少ないために断定的なことを述べられる段階になく、今後、資料の蓄積を待つしかない。しかし、少なくとも、アイヌ語の古記録に現れる日本語表記は、同時代の日本語文献の仮名の用法と著しく乖離しているとまでは言えないが、細部では逸脱を示し、問題はそう単純ではない、ということと言えるであろう。アイ

⁶ 「和泉家古本」を指す。

ヌ語古文獻における日本語表記における仮名の用法の特徴は、地方差や内容上の差、という観点も加味した上で検討する必要があるかもしれない⁷。

5. アイヌ語古文獻におけるアイヌ語の仮名の用法

アイヌ語古文獻におけるアイヌ語を表記する仮名の具体例は次のようなものである。意味は文獻の表現そのままではなく、便宜的に変えたところがある。なお、詳しい情報は佐藤 1998, 1999, 2014) を参照されたい（松は「松前ノ言」、狆は「狆言葉」の略）。

- 「あ」：あまも「米」（松），あま母「米」（狆）
「い」：いしやま「無い」（松），い志やま「無い」（狆）
「う」：せう「鍋」（松），う志や「台所」（狆）
「お」：おまん「行く」（松），お多「浜」（狆）⁸
「於」：於川ね連「添う」（松）
「か」：かもい「神」，とうかつふ「昼」（狆）
「可」：可んたち「糶」（松），てう可ひ「お前」（狆）
「可」：徒可くふ「秋」（狆）
「き」：志き「目」，き志やら「耳」（狆）
「ぎ」：志んぎ「疲れる」（狆）
「起」：し起「目」（狆）
「キ」：本川キ「玉門」（狆）
「く」：く者ん尔「私」（松），くう「弓」（狆）
「ぐ」：志ゆんぐ「松」（狆）

⁷ 今回は深く検討することができなかったが、日本語部分のみならず、アイヌ語部分に関しても、語頭と語中語尾の仮名の使い分けが存在する可能性があり、これは従来はあまり注目されなかった観点であると思われる。

⁸ 「お」はいずれの文獻でも語頭の例しかない。

- 「け」： 本しけ「待て」(松)，めらいけ「寒い」(狢)
「げ」： い多げ「梔」(狢)
「介」： やいらい介れ「かたじけなし」(松)，おま介るし「蛙」(狢)
「遣」： 遣ん本「針」(松)
「こ」： めのこ「女」(松)，めのこ「女」(狢)
「ご」： 志りごて「繋ぐ」(狢)
「さ」： さけ「酒」(松)，さく「夏」(狢)
「し」： 糸むし「刀」(松)，しと「餅」(狢)
「じ」： むじ路「粟」(狢)
「志」： 志や類、^レ「鶴」(松)，い志やま「無い」(狢)
「す」： 者すく類「カラス」(狢)
「寿」： も寿「蠅」(狢)
「せ」： せ、川可い「湯」(松)，せ川婦「魚」(狢)，せ川る「背中」(狢)
「セ」： あち可セしけ「?」(狢)
「そ」： さいそく「催促?」(松)，おそろ「尻」(狢)
「た」： にしやた「明日」(松)，うた「ナマコ」(狢)
「だ」： ゆだ「突く?」(狢)
「多」： おひ多「皆」(松)，ま多「冬」(狢)
「堂」： きうう當川ふ「四月」(狢)
「ち」： ち可川ふ「鳥」(松)，ちつ婦「舟」(狢)
「つ」： 糸つう「鼻」(松)，あつい可もい「海の神」(狢)，本つ「二十」(狢)
「川」： 王川可「水」(松)，ま川ね本^レほ「女の子」(狢)，あ川い「海」(狢)
「徒」： 徒川ふ「二」(松)，徒、婦「日月」(狢)
「て」： てい多「ここへ」(松)，志りごて「繋ぐ」(狢)
「と」： あふと「雨」(松)，志とま「恐れる」(狢)
「な」： か可れてい「こんにちわ」(松)，な可らてい「こんにちわ」(狢)
「那」： あ川い那「蛸」(狢)
「に」： にしやた「明日」(松)，とに「ミミズ」(狢)
「尔」： や尔「お前」(松)，尔し者「旦那」(狢)

- 「耳」： いじ屋耳「マス」(狹)
「ぬ」： ぬんま「毛」(松)，いぬへ「炬縁」(狹)
「ね」： 志ね川ふ「一」(松)，ね(？，焼失部分不明)(狹)
「柎」： 柎王ありき「どこから来た」(狹)
「年」： 可年「？」(松)，志年ふ「一」(狹)
「の」： めのこし「女」(松)，のちう「星」(狹)
「乃」： 乃可うし「釜？」(松)
「者」： く者ん尔「私」(松)，者い可類「春」(狹)，者るき「左」(狹)
「者ゝ」： 志や者ゝ「頭」(狹)
「ハ」： ハ(接続助詞？)(狹)
「ひ」： おひ多「皆」(松)，あきなひ「商い」(松)，可もひ「神」(狹)，ち
ひ屋川「ツバメ」(狹)
「び」： ゑびらけ「包丁」(狹)
「飛」： 飛類可「良い」(狹)
「飛ゝ」： 飛ゝるか「良い」(狹)
「ふ」： 徒川ふ「二」(松)，ふ志尔「ホオノキ」(狹)，志年ふ「一」(狹)
「ぶ」： へとぶ「戻る」(松)，あぶと「雨」(狹)
「婦」： ちつ婦「舟」(狹)
「婦ゝ」： お者こ婦ゝ「海藻」(狹)
「へ」： へめ寿「上る」(狹)，へてとく「川上」(狹)
「べ」： るやべ「荒天」(狹)
「遍」： 遍たけ「早く」(松)
「ほ」： いほまし「可愛い」(松)，ほく「夫」(狹)，ほん「小さい」(狹)
「ぼ」： ぼん「小さい」(狹)
「本」： 本ん「小さい」(松)，本川ゑ「呼ぶ」(狹)，本ん「小さい」(狹)
「本ゝ」： 本ゝほ「子供」(狹)
「ま」： 遣んま「足」(松)，まち「妻」(狹)，みまけ「齒」(狹)
「満」： よこ多満「添える？」(松)，し満「磯」(狹)
「ミ」： あミこらち「薄いもの？」(松)，婦ミ類い「ヤマドリ」(狹)

- 「む」： ゑむし「刀」(松)， ゑるん「腐る」(伏)
「め」： ちめんふ「着物」(松)， ちめ婦「衣類」(伏)
「免」： 免し「？」(伏)
「も」： かもい「神」(松)， かもい「神」(伏)
「毛」： 毛川らいけ「忙しい」(松)
「や」： やいらい介れ「かたじけない」(松)， やむ「栗」(伏)
「屋」： ちひ屋く「ツバメ」(伏)
「ゆ」： ゆるしか「怒る」(松)， 志ゆんぐ「松」(伏)
「よ」： よこ多満「添える？」(松)， よく遍「鎌」(伏)
「ら」： やいらい介れ「かたじけない」(松)， 連いら「風」(伏)
「り」： 志りく川ねハ「暗い」(松)， けり「足袋」(伏)
「里」： 里い「高い」(松)， きゝ里「虫」(伏)
「る」： びる可「良い」(松)， 飛る可「良い」(伏)
「流」： 者類可流「辛い」(伏)
「類」： 志や類ゝ「鶴」(松)， 者い可類「春」(伏)
「れ」： いらもし可れ「知らない」(松)， ふれ「赤い」(伏)
「連」： 連川ふ「三」(松)， 連いら「風」(伏)
「ろ」： 遍ろ川け「鯉」(松)， 本ろの「たくさん」(伏)
「王」： 王んふ「十」(松)， 王つてし「俵」(伏)
「路」： ゑじ路「栗」(伏)
「ゐ」： 本うゐん「獣物」(伏)
「ゑ」： ゑ川ね「嫌う」(松)， ゑ志やむ「無い」(伏)
「を」： 志をふ「箱」(伏)
「ん」： 遣ん本「針」(松)， 本ん「少ない」(伏)

以上のような例から明らかなように、アイヌ語を仮名表記する際、かなり多種多様な種類の文字が現れることがわかる。問題は、これらの文字の使用に関して、何らかの使用原理というものはないのだろうか、という点である。個々の用例を見ているだけではよくわからないが、実は、各文献の仮名の用

例数を一覧表(末尾の表を参照)にしてみると、興味深い事実が浮かび上がってくる。すなわち、前節では、アイヌ語を記した古記録も、特に日本語の表記に関しては同時代の仮名文書とある程度類似した性質を示す可能性を指摘したが、今回の分析によって、同じく仮名を使用してはいても、アイヌ語を表記した部分においては、日本語部分の仮名の使用とは異なる特徴が存在する可能性が明らかとなった。もしそうであるならば、文書の年代や資料的な価値の判定に有用な手がかりになると思われる。次にこの点について述べることにする。

6. 日本語とアイヌ語における表記上の差異

末尾の表は、おのおのの文獻について、日本語部分とアイヌ語部分に分けて使用されている仮名の例数を整理し、参考として、同時代の日本語仮名文獻に現れる仮名の種類を高山(1990)によって示したものである⁹。

詳細は今後の研究が必要な部分が大きいが、概略的に言って、「松前ノ言」と「伏言葉」が仮名の使用に関してある種の平行性を示している点が注目される。用例数が少ないものについては確証が得られないので保留するとして、比較的用例数が多いものについて見ると、たとえば次のような傾向があることが見てとれる。

- 1) 「松前ノ言」と「伏言葉」において、「可」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い(それぞれ、アイヌ語：日本語＝23：12/57：29、以下同様)。
- 2) 「松前ノ言」と「伏言葉」において、「志」は日本語の表記よりも、ア

⁹ 空欄は用例がないことを示す。また、高山(1990)は例数を述べていないので、単に「現れる」ということを○という記号で示した。もちろん、今後は用例数を明らかにした上での分析が必要であるが、暫定的な目安としては有用であると考えてこのような形で整理してある。

アイヌ語の表記に用いられる傾向がかなり強い (23 : 5/87 : 4)。

- 3) 「松前ノ言」と「狃言葉」において、「川」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い (33 : 11/30 : 6)。
- 4) 「松前ノ言」と「狃言葉」において、用例は多くないものの、「遍」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向があるようである (10 : 1/9 : 1)。
- 5) 「松前ノ言」と「狃言葉」において、用例は多くないものの、「本」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い (11 : 3/37 : 8)。
- 6) 「松前ノ言」と「狃言葉」において、用例は多くないものの「連」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い (5 : 1/24 : 3)。

「王」や「ん」のようなものも同様に考えて良いかもしれないが、用例がそれほど多くなかったり、アイヌ語と日本語との音韻体系の差異も関係する面があるので、今後の課題としたい。

さて、このような文字の頻度の違いが何を意味しているのかは問題である。様々に解釈が可能であろうが、一つ考えられるのは、異なる言語を表記仕分ける意図があったのではないかと、ということである¹⁰。つまり、同じく仮名を用いていても、日本語とアイヌ語とで使用される仮名を使い分けることで、その目的を達しようとした、という可能性である。このような使い分けがど

¹⁰ 4節で述べた「和泉流狂言台本」にみられる語頭、語中語尾における仮名の使い分けと、それほどはっきりしたものとは必ずしも言えないが、アイヌ語古文獻にも同様な使い分けの傾向があると思われることから考えると、語中語尾に主として用いられる仮名は、語頭に用いられるものに比べると有標 (marked) である、という意識があった可能性がある。それが、語中語尾に現れる仮名をアイヌ語の表記により多く使う、という結果を生んだとも考えられる。今後、より多くの資料の発見によってこの点が明らかになることを期待したい。また、この仮説が正しいとすれば、アイヌ語ではなく、ポルトガル語のような外国語を仮名で表記した文獻においても、語中語尾に用いられる仮名が多 dụngされることが予想される。この点についても専門家のご教示を期待したい。

の程度意図的なものであったのか、また、なんらかのお手本があったのか等、検討が必要な点は極めて多いが、少なくとも、時代が似通った、内容的にも性質が似ている文献が、ある意味当然ではあるけれども、表記上、よく似た性質を示す、ということはあるようなことでもあるし、興味深いことでもある。なぜなら、もしそういうものがあるとすれば、それを利用して、筆者や年代が不明な文献についてある程度の文献学上の見通しを得ることも可能になってくると思われるからである。次に、実際にそのような検討を具体的な文献について行ってみることにする。

7. 仮名表記からみた「えそさへつり」の資料的位置付け

既に述べたように、アイヌ語を記録した古文書で、書写年代が確実に古いものは、事実上、「松前ノ言」と「狹言葉」の二点しかこれまでに知られておらず、極めて貴重である。しかしながら、近年、内容面で、これら二点の古い、貴重な文書と共通点を持つ興味深い文献が佐藤（2017）によってカラー影印付きで紹介された。すなわち、岩手県盛岡市盛岡市中央公民館旧蔵で、現在もりおか歴史文化館所蔵の「狹さへつり」と題されたアイヌ語の語彙集である。この語彙集は、佐藤（2017）が指摘しているように、内容面で、偶然の一致とは考えられない共通の特徴を「松前ノ言」と「狹言葉」との間で示し、これらの文献と成立年代が近いことが推定されたが¹¹、筆者、書写年代のいずれも不明であるため、資料的価値に大きな限界があった。もしも、内容以外の、意図的な模倣がしにくい、より形式的な特徴の一致が示されれば、より確実に年代の推定が可能になるはずである。ここでは、前節で指摘した日本語とアイヌ語との間に存在する、これまで注目されていなかった表記上の差異に注目し、それらの点について「狹さへつり」がどのような性質を示

¹¹ たとえば、「な可らてい 久敷有テ」は、inankarapte「こんにちわ」に相当するものであるが、多くの文献に普通によくみられるものではない。しかし、「松前ノ言」と「狹言葉」にはみられる。

すかを見てみることにする。末尾の表に示したデータに従って分析した結果は以下の通りである。

- 1) 「松前ノ言」と「狃言葉」と同様、「狄さへつり」においては、「可」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い（アイヌ語：日本語=91：22、以下同様）。
- 2) 「松前ノ言」と「狃言葉」と同様、「狄さへつり」においては、「志」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向がかなり強い（173：6）。
- 3) 「松前ノ言」と「狃言葉」と同様、「狄さへつり」においては、「川」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い（80：7）。
- 4) 「松前ノ言」と「狃言葉」と同様、「狄さへつり」においては、用例は多くないものの、「遍」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向があるようである（38：3）。
- 5) 「松前ノ言」と「狃言葉」と同様、「狄さへつり」においては、用例は多くないものの、「本」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い（39：0）。
- 6) 「松前ノ言」と「狃言葉」と同様、「狄さへつり」においては、用例は多くないものの「連」は日本語の表記よりも、アイヌ語の表記に用いられる傾向が強い（33：1）。

以上から明らかなように、「狄さへつり」は内容面のみならず、形式面でも重要な特徴の一致を示す。無論、これだけから断定的なことを述べることはできないが、「狄さへつり」の資料的な位置付けを明らかにする上で、このような表記上の特徴は、有益な特徴の一つなのではないかと考える。

8. おわりに

本稿では、「松前ノ言」と「狃言葉」という、書写年代が古いことが確実な

文献を整理し、日本語、アイヌ語、両言語の表記を検討した。その結果、使用されている仮名の種類は同時代である江戸初期の日本語文献に用いられているものと大きく矛盾しないことが示された。さらに、これまで明確に指摘されてこなかったことであるが、「松前ノ言」と「狄言葉」は、日本語表記の仮名とアイヌ語表記の仮名の種類が組織的に異なるという共通の特徴を示す。この特徴は「松前ノ言」と「狄言葉」が属する江戸初期のアイヌ語資料の特徴の一つと考えられ、内容面に加えて、この表記上の特徴を併用することにより、年代不明の文書の資料的位置付けを明らかにできる可能性を指摘した。さらに、そのような分析の実例として、もりおか歴史文化館所蔵の「狄さへつり」というアイヌ語彙集をとり上げ、仮名表記を検討した。その結果、この文献が「松前ノ言」と「狄言葉」とに共通する表記上の特色を有することが明らかとなった。内容面のみならず、表記面でも偶然の一致とは考えられない一致を示すことから、「狄さへつり」が数少ない、江戸初期にさかのぼる可能性のある、貴重なアイヌ語資料の一つである可能性が高いことを指摘した。今後はさらにデータ量を増やし、文字種に関する検討を行って仮説のさらなる検証に努めたいと考えている。

表 各文献における仮名の使用状況

	松前ノ言 (アイヌ語)	松前ノ言 (日本語)	狄言葉 (アイヌ語)	狄言葉 (日本語)	狄さへつり (アイヌ語)	狄さへつり (日本語)	和泉流狂言台本 (日本語)
あ	13	8	45	13	74	8	○
阿					26	1	○
い	34	52	63	73	219	27	○
う	16	11	60	11	103	12	○
え						1	○
お	7	2	42	5	45	5	○
越		1			1		
於	1				31	3	○
大						1	
か	3	4	23	5	71	10	○
が				1	1		

北大文学研究科紀要

可	23	12	57	29	91	22	○
可。			1	2			
き	12	15	19	6	74	33	○
キ			1	9		42	
ぎ			1	1			
支				2			
起			25	7	3		○
希					6		
く	13	5	50	31	126	17	○
ぐ	1		1	2			
ク				1		6	
具					22		○
久				1			
け	8	8	23	10	96	11	○
げ			1	2			
ケ				1		3	
遣	6	1					○
介	1		1	1			○
こ	7	11	19	21	57	8	○
ご			1				
古					16	2	
さ	4	2	5	9	24	10	○
ざ						2	
し	16	17	51	19	141	11	○
じ			2	1			
志	23	5	87	4	173	6	○
志。			1				
シ						2	
す		1	2	2	1		○
寿		2	4	9	7	11	○
寿。				2			
須					1		○
ス						5	

アイヌ語古文獻における仮名の用法

せ		6	2	5	25	8	○
セ			1	1			
そ	1	7	2	6	10	13	○
楚					1		
た		4	12	3	75	21	○
だ		1	1	1		3	
多	8	5	34	20	39	15	○
多。				1			
當							○
堂			2	1			○
ち	15	6	34	6	71	4	○
ぢ			1	2			
地					1		○
つ		6	33	12	67	4	○
ツ			1	2		16	
川	33	11	30	6	80	7	○
徒	3		13	2	60		○
て	5	3	13	6	25	12	○
で						1	
而				9			
テ						4	
と	8	47	30	95	50	71	○
ど			2				
ト				22		70	
登					1		○
な	4	15	29	26	43	19	○
那			3	4			○
に		2	3	2	27	1	○
ニ				23		27	
尔	4	3	25	4	34	2	○
ぬ	2	1	7	2	33	9	○
ね	17		1				○
祢			10	3	61	1	○
年		1	15	3	12		○
の	3	49	34	50	62	30	○

北大文学研究科紀要

ノ				28		460	
之		1				44	
乃	1	22			4		○
農							○
は					9	2	
ば					6		
ハ		8	1	332		3	○
バ			1			1	
者	17	10	22	9	54	8	○
者。			17	3	14		
ひ	3	14	23	9	27	5	○
び	2		3	4	1	2	
飛			8	9	10		○
飛。			5				
ふ	23	41	31	49	71	1	○
ぶ	1		8		4	1	
婦			36	2	48	46	○
婦。			4	2		2	
へ		5	13	12	35	16	○
べ			8	4	24	3	
遍	10	1	9	1	38	3	○
遍。			21		10		
は	1		15		46	2	○
ば			2		3		
本	11	3	37	8	39		○
本。			10	1	1		
ま	14	5	38	6	42	5	○
満	2	2	8	7	67		○
み					2	2	
ミ	1	2	2	6	22	3	○
耳			1				
見							○

アイヌ語古文獻における仮名の用法

む	3		17	8	41	4	○
無					7		
め	4	3	9	6	11	5	○
免			1				○
も	5	5	17	25	6	9	○
毛	3	1			35		○
茂						1	
や	11	6	63	8	103	14	○
屋			4	1	26		○
ゆ	6	3	12	2	63	5	○
よ	1	4	12	10	29	8	○
ら	17	6	30	12	83	7	○
羅					2		
り	5	5	40	21	66	7	○
里	3		5	1	17	2	○
流			1		63	8	○
る	5	7	31	18	21	15	○
ル				7		44	
類	1		15	6			○
累					35	3	
れ	5	2	9	5	17	11	○
レ				1		3	
連	5	1	24	3	33	1	○
ろ	6	2	18	3	18	6	○
路			3		14		○
わ		1			6		○
ワ						1	
王	7	3	11	6	42	7	○
ゐ			2		3		○
ゑ	10	2	24		89		○
を		1	1	160	5	11	○
ヲ				126		16	
ん	29	6	73	5	215	3	○

(上の表では「可[◌]」のような変体仮名の濁点は文字処理の都合上、右肩ではなく左下に置かれている点に注意されたい。)

参考文献

- 金田一京助 (1913/1993) 「蝦夷語学の鼻祖上原熊次郎と其の著述」 (『金田一京助全集』 6. 東京：三省堂.)
- 金田一京助 (1924/1993) 「世界最古の蝦夷語彙 — 佐々木博士所蔵の『松前ノ言』について」 (『金田一京助全集』 6. 東京：三省堂.)
- 国語学会 (編) (1980) 『国語学大事典』 東京：東京堂.
- 國東利行 (2010) 『宝永元年 (1704) 松前・蝦夷地納経記 付アイヌ語集』 札幌：北海道出版企画センター.
- 松尾弘徳 (2008) 「因由形式間の包含関係から見た天理図書館蔵『狂言六義』」 『文献探求』 46：1-15.
- 中田祝夫 (編) (1972) 『講座国語史』 2. 東京：大修館書店.
- 坂口至 (1989) 「近世初期の送り仮名：和泉流古狂言『和泉家古本』の場合」 『国語国文学研究』 25：1-14.
- 佐藤知己 (1995) 『蝦夷言いろは引の研究』 札幌：北海道大学文学部.
- 佐藤知己 (1998) 「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(1)」 『北海道大学文学部紀要』 46(3)：41-64.
- 佐藤知己 (1999) 「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(2)」 『北海道大学文学部紀要』 47(4)：53-88.
- 佐藤知己 (2008) 「アイヌ語古文獻における言語学的諸問題」 『北海道大学文学研究科紀要』 124：153-180.
- 佐藤知己 (2009) 「18世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」 『北海道大学文学研究科紀要』 127：29-58.
- 佐藤知己 (2014) 「宝永元 [1704] 年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」の言語学的考察」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 20. 1-133.
- 佐藤知己 (2015) 「宝永元 [1704] 年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」の仮名・音素対応表」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 21. 1-25.
- 佐藤知己 (2016) 『「狄言葉」の研究』. 札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 佐藤知己 (2017) 『「狄さへつり」の研究』. 札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 白井純 (2012) 「キリシタン版の原語にみる仮名用字法の意識 — 活字本と写本の比較から」 『人文科学論集』 46：21-30.
- 高山百合子 (1990) 「和泉流狂言台本の表記に関する覚え書き」 『島根女子短期大学紀要』 28：21-29.
- 矢田勉 (2012) 『国語文字・表記史の研究』 東京：汲古書院.

附記：本稿は 2017-2022 年度科学研究費基盤研究(C)「古記録の言語学的分析に基づくアイヌ語史の検証」(課題番号 17K0270807, 研究代表者：佐藤知己), 2017-2022 年度科学研究費基盤研究(C)「Towards understanding dynamics of language change in Ainu」(課題番号 17K0274431, 研究代表者：Bugueva, Anna) による研究成果の一部である。